Raffiné Journal vol.14

見られるために立つ身体

ステージの光の中で、
その人はまっすぐこちらを見る。

身体が前に出る。
視線を引き寄せるように踊る。

見てほしい。

その気配は、
言葉より先に身体に出る。

その表現者は、
歌って踊る人だ。

インタビューで、
踊るときの気持ちを聞かれていた。

「自分だけを見てほしいと思って踊っています」

その人のダンスは、
視線を強く引き寄せる。

身体が場の中心に立つ動きだ。

その人は、
いつも明るい人という
印象を持たれている。

場に出ると、
空気は軽くなる。

ただ、
歌やダンスの合間に、
動きがふっと止まる瞬間がある。

そこに、
別の層が残る。

明るさだけではない、
もう一つの気配。

ある取材で、
その人が読んだ小説の話をしていた。

主人公は、
人には言えない過去を抱えながら
社会で生きていく人物だという。

インタビュアーが聞いた。

「もしその人に会ったら、
どんな言葉をかけますか？」

その人は少し考えて、
こう答えた。

「声はかけないと思います。
その人には、
その人にしかわからない時間があると思うので。」

ステージでは、
見てほしいと言って踊る。

身体は強く前へ出る。

けれど、
人の人生の話になると、
そこには踏み込まない。

その人には
その人にしかわからない時間がある。

そう言って、
距離を保つ。

表現は、
見てほしいという力で前に出る。

身体は中心に集まる。

けれど、
人の時間には入らない。

強く引き寄せる。

それでも、踏み込まない。

その二つが同時にあるとき、
表現は奥行きを持つ。

引き寄せながら、入らない。

R.

Raffiné Journal vol.14
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné